

ニュース

『最後の辺境 チベットのアルプス』

第2回梅棹忠夫・山と探検文学賞受賞に寄せて

永田秀樹

中村保著「最後の辺境 チベットのアルプス」がこのたび「第2回梅棹忠夫・山と探検文学賞」を受賞した。

世界各地で学術調査を実施し、生態学者、民俗学者として知られ、比較文明論を唱えた梅棹忠夫さん。中国南西部に20年以上に渡ってフィールドワークを重ねて来た中村さんにふさわしい賞で、担当編集者として、とても嬉しかった。最終選考の5作品に入っていると聞いたころ、著者の中村さんからメールが届いた。ミラノ大学のF・マルタさんが「最後の辺境 チベットのアルプス」を卒論に取り上げ、自宅を訪問したとの内容で、二人の笑顔の写真も添付されていた。

長年、日本山岳会の「Japanese Alpine News」を編集し、英国の王立地理学協会から横断山脈研究の功績でバスケット・メダルを受けた中村さんの世界的なネットワーク、発信力の証であり、受賞を確信したメールとなった。

中村さんから出版の話があったのは2010年秋、編集にとりかかったのは翌年3月だった。すでに、「ヒマラヤの東」「深い浸食の国」「チベットのアルプス」の3部作を山と溪谷社から出版し、秩父宮記念山岳賞に輝いている。この3冊で、チベットのラサから四川省の成都までの広大な地域の概略は把握出来るため、次の新たな本には何を加えるべきであろうかと考えた。

未踏の辺境や山岳を紹介するために重要視されるのは、記述の正確さと写真、詳細な地図である。

写真を中心にした大型本は、2008年ドイツ・ハンブルグの DetJen-Verlag社から「Die Alpen Tiber」(テキスト、地図30葉、写真260枚)が刊行されている。発行者の精神科医D・ペドロさんは、この本のために出版社を起し、現在は最新の写真を加えて、山域別に全4巻の英語版を編集中で、今年末ごろには出版されるという。

すでに大型本と3部作があるので、英語版のダイジェスト版として、山域別に全体を解説する内容を考えてみた。しかし最初の打ち合わせで、中村さんは完璧な案を練り上げていた。9割以上の完全原稿と使用すべき山岳写真が準備さ

れ、懸案の地図は、この地域の踏査経験を持つ竹内康之さんの精密かつ詳細な図が、山域ごと、踏査ルートごとに添えられていた。

精読すると、山溪3部作以降、2005年からの踏査記録が網羅されていた。重複する地域でも、より深く未踏の山々を求めて分け入り、その素顔に迫っている。3部作を読んで横断山脈を理解したつもりだったのが恥ずかしくなる。

禁断の易貢蔵布探査など、「最後の辺境」の広大な踏査が3冊に収まるわけがなく、はるかに広くて奥深い。さらに四川、雲南、東チベットなどの探検隊の足跡や宣教師たちの苦闘を追って綿密なフィールドワークを重ね、時に宣教師の文献を探ってパリにも飛ぶ。中村さんの執念には圧倒された。

編集者として、写真と地図にできる限りページを割くことにしたが「梅棹賞」の受賞理由は「フィールドワークの重要性、地図の正確さ、中村さんの探究心」とあり、我が意を得た思いだった。

中村さんは「最後の辺境」について、海外だけで14カ国、29回の講演を行い、貴重な山岳情報など惜し気もなく提供する。外国での反響や交流、講演旅行等にも章を割いているが、情報を隠さず共有することによって、友情は普遍的になることも示している。

「登山家は読むこと、登ること、書くことの3つそろって一人前」が中村さんの座右の銘だが、担当して思うのは、現代の登山家・探検家はこれに「伝えること」を加えるべきではないか。インターネットの時代は、書くだけでは足りず、積極的に発信することによって多くの情報が集まり、より大きな成果を生み出していく。

中村さんは現在、地図と写真を組み合わせた「チベットのアルプスと辺境の地図集」(英・日・中国語)に取り組んでいる。地図作製は竹内康之さん。足りない写真は世界中から集めているという。この書もまた、多くの登山家を導く貴重な書物・資料となろう。